

## 松下幸之助の死後の世界観

松下理念研究部 副主任研究員 大江 弘

気をつけて書店の棚を見回してみると、死そのもの、あるいは死に関連すると思われるテーマの本が、思いのほか数多く見受けられます。さらにそうした本の中でも、ここ数年において特に目立つのが、生まれ変わりの記憶等、前世と呼ばれるものを前提とした類の本です。近年、多くの若者の支持を集めている新々宗教には、ほとんどいついていいほどの輪廻転生観が教義として取り入れられています。また、大学生を対象としたある意識調査によれば、五二パーセントの人が輪廻転生はあると考えているともいいます。もしかすると、死後の世界に対する関心の高まりとともに、輪廻転生観が一般的な考え方になりつつあるのかも知れません。

さて、それでは松下幸之助は、死後の世界について、いったいどのように考えていたのでしょうか。

### 宇宙根源の力と生命力

それを知るためには、まず松下が、人間の生死ということはどう考えていたかを見なければなりません。

私たちがいるこの宇宙は、常に千変万化し、止むことなく動き続けています。その姿を眺めつつ松下は、宇宙がそのように動きつづけているのは、そこに何らかの力が働いているからに違いないと考えました。そしてその力を松下は、宇宙根源の力と名づけました。目には見えないけれども、宇宙根源の力が働いているからこそ、この宇宙は静止することなく絶えず動きつづけていると考えたのです。

そうであるならば、当然、宇宙の一部である私たち人間もまた、この宇宙根源の力の働きによって存在し、生きているということになります。そこで松下は、私たち人間が生きているのも、この宇宙根源の力のおかげ、言いかえれば、宇宙

根源の力の意志によって、生命力が与えられているからだと考えました。

ここで松下の言う生命力とは、『生』きる力であり、かたがたに生きるかという生き方を与える使『命』の力です。また、いわゆる靈魂と言われるものと同じであるともしています。そして、こうしたみずからの考え方を踏まえて松下は人間の生死を次のように説明しています。

「肉体の形成と同時に、この生命力が宇宙根源の力によって与えられるのであります。そして、これが人間の生の始まりとなつてくるわけでありませぬ。それでは、人間の生の終り、つまり死はいつかといひますと、それはその人間の肉体の活動が止り、生命力が再び宇宙根源の力に帰つてゆくその瞬間であります」(『PHP』昭和二十五年五月号)

### 宇宙根源の力へ回歸する生命力

それでは松下は、死んだ後はどうなると考えていたのでしょうか。

死後の世界観には、一般的に二つのものが考えられます。一つは、死んだらすべておしまいで何も残らないとする唯物論的な見方。今一つは、天国や地獄等の死後の世界に人間の魂が行く、あるいは死んでもまた生まれ変わつてくるという輪廻転生などの靈魂不滅観です。松下の場合、生命力(靈魂)は宇宙根源の力に帰つていく、つまりなくならないとしているので、明らかに後者に属するといえるでしょう。

では、天国や地獄などの死後の世界を想定したのでしようか。それとも輪廻転生観に立っていたのでしょうか。

「靈魂は不滅であつて永遠にその存在を保つてゆくのであります。しかしながら残つてゆくといつても、Aの人の靈魂Bの人の靈などという個別の形で残つてゆくのではなく、それは人間の肉体からはなれて、宇宙の大生命(宇宙根源の力)に歸納し一体化してゆくのであります」(『PHP』昭和二十五年六月号)

輪廻転生観はもとより、天国や地獄などの死後の世界を想定する考え方も、おそらく個性の存続を前提していると考えられます。言いかえれば、魂には、生きていたときの記憶、ものの見方や考え方、感情や欲求等がそのまま保持されるとい

うわけです。ところが松下は、そうした個性はなくなつてしまつてはないか、と言つたのです。

「ぼくは、新しい生命は、やはり大宇宙の生命体から出てきて、それが個々の肉体に結びつき、新しい個々人が生まれるのだと思つた。そしてその人の死後は、また宇宙の生命体に歸る。それはたとへば、同じ鉄でつくられていたものでも、鋏もあればナイフもあるわね。ところがそれらが使えなくなると、溶鉱炉に入れられて溶かされ、再び同じ鉄になる。そこでは鋏であるとかナイフであるとかの区別はなくなるけれど、その溶鉱炉の鉄によって、再び鋏もナイフも新たにつくられる。死後の生命が歸つていく大宇宙の生命体というのは、ちよつとこの溶鉱炉のようなものと考えられるんじゃないかな。だから、死後の生命については、宇宙の生命体に歸納し一体となつて、個々にはもう存在しない、そう考えるんだけど、どうだろうか」(『研究会抄録』昭和四十九年三月)

永遠に自分を保持したいという欲求は、おそらく自己保存という自然な欲求に根を持つものでしょう。しかし松下の考え方には、そうした私的な欲求がありません。すなわち、松下の死後の世界観では、私という個性の面では唯物論的に有限なものとし、魂という面では永遠であるとしているのです。これは折衷的な死後観であり、他にはないきわめて特異なものではないでしょうか。

以上松下の死後に関する考え方を簡単に見てきました。しかし、どうもこの考え方にはそれほどこだわつていなかったように思われます。

「死後の世界は、現世に生きている人間がこれを認めるわけです。あるかないかは別の問題です。あると認めていくほうがより深い人間生活ができる。現世に対してプラスするといふように死後のことを考えているわけです」(『松下幸之助発言集十六巻』)

要は、どう考えれば、今、このときを、宇宙や社会と調和しつつ、力強く生きていくことができるか、ということなのでしょう。